



勝田徳朗(1953年千葉生まれ)ステップス初個展である。勝田は今回、大小多彩に展開する《タマゴから 生える》61点を壁面に、床に、画廊の隅々に出品した。驚くべきことは作品を「出品」しているのではなく、抽象絵画を中心に流木を削って作成した立体に黒い布を影の様に施した作品を「インスタレーション」した点にある。ステップスギャラリーが全く異なる現場と化す。その現場とはDMにあるような海、これまで23回開催してきた個展会場 そこには野外も含まれるのであろう、全く未知なる森の風景が浮かび上がってくるのだ。それ程までに、この展覧会は作品と共に「配置」が優れている。勝田がギャラリー入口に置いたスチューツメントを引用する。「生える=(生命の有るものが)大きくなって外に見えてくる:新明解国語辞典」このことを「生える=(生命の無いもの=流木が)形を変えて外にイメージを生成しながら見えてくる」と設定してみたい。それは、以前この世界にあった樹木・流木としての時空間から、現在の世界になかった「何か」が生まれてくる試みである。反面、この世界にあった「何か」が消滅することに思いを馳せることにも繋がる試み...すなわち生滅のイメージの試みである。」生滅という呼吸を入れ替えと読んで良いだろう。

丸い卵型と影の様な布が引っくり返るように見える。壁面が床に、床が天井の様に感じてくる。平面は説明的に感じるかも知れないが、実は立体と平面という二つの事項を完全に排していく。ここにあるものは何だろう。美術作品なのか?と、疑問が沸くほどのパラダイムシフトが生じる。流木を卵型に「加工」することによって、抛り自然物に近づいていく印象を受けるのは、私の錯覚であろうか。我々が形而上的に持つイメージに寄り付こうと作品は生滅していない。作品を見続けると、むしろ卵というイメージが次々と破壊される。そして、自然が浮かび上がってくる。我々がどのような文明を手に入れたとしても、我々自身が自然物であることから逃れることは決してないのだ。

